

博士学位申請論文

政党政治家としての田中角栄

一日中国交正常化に至るまでの政治的台頭 一九四七～一九七二

要約

朱 曉凡

はじめに

本論文は、日中国交正常化を成し遂げた田中角栄に注目し、日中国交正常化実現に至るまでの田中の対中構想や政治手法と、政治的台頭の過程を明らかにしようとしたものである。

まず、田中角栄に関する研究を整理し、日中国交正常化を成し遂げた田中を全体的に考察するために、次の四つの視点で捉えることを提起している。

第一は、田中の対中構想と政治手法を検討することである。1972年9月、田中は、一気に日中国交正常化を実現し、田中政治の最高潮を迎えた。本論文においては、田中の対中構想がいつ芽生えたのか、どのように展開していったのかについて述べる。また、後に日中国交正常化交渉において余すところなく発揮される、慎重な根回し・官僚の使いこなし・迅速な行動力を柱とする政治手法が、田中の政治人生においてどのように培われたかを検討している。

第二は、田中が日中国交正常化に至るまでに、実際にどのような政策を実行しながら台頭していったのかの過程を検討することである。また、吉田茂、岸信介、池田勇人、佐藤栄作の四人の人物を中心に自民党の変遷や派閥の消長を見ながら、田中が政策実行能力をいかに示し、どのように権力を掌握していったのか、その過程についても論じる。さらに、田中が権力を掌握していく過程において、田中政治がもたらしたマイナスの面も含めて、田中政治全体を見渡しながら検討した。

第三は、田中角栄と田中の最大のライバルであった福田赳夫の政治指導や政策面、とりわけ中国問題における捉え方の違いを考察する。そのことにより、田中がどのようにポスト佐藤の有力候補としての立場を確かなものとし、最後に福田を打ち破り、首相の座に就くことができたかを論じる。また、本論文は、田中と福田との政治家としての対決の一側面として、田中角栄・大平正芳の友情や、大平が後に会長となった宏池会の動向についても検討を加え、田中―大平ラインの形成が田中の政権掌握にどのように作用していったかについても検討した。

第四は、田中角栄の選挙活動を見ることである。田中は、初出馬した1946年の第22回衆議院総選挙に落選した。本論文は、田中がこの落選からどのような教訓を得て、次回に当選を果たし、その後の安定した当選に結び付けていったかについても分析した。また、田中の選挙基盤がいつ頃から安定し、それが田中の自民党内での台頭にどのように影響していったのかについても考察した。

本論文は、これら四つの視点のもとに、第一章では政党政治家以前の田中を、第二章では吉田茂内閣・岸信介内閣・池田勇人内閣における田中の動向を、第三章では第一次・第二次佐藤栄作内閣における田中の政治指導を、第四章では第三次佐藤栄作内閣期の日米繊維問題における田中の政治指導を、第五章では日中国交正常化気運の高揚と田中の対中構想を、第六章では田中内閣の成立と組閣工作を、第七章では日中国交正常化交渉への田中の政治指導を分析し、最後に本論文全体の総括として結論を整理し、日中国交正常化後の見通しを述べるとともに、今後の日中関係を改善へと導くための政治家のあるべき姿を考察した。

第一章 政党政治家以前の田中角栄

第一節では、これまでの研究において十分に論じられていなかった田中の少年期について考察している。すなわち、少年期に、田中が素直に人間を信頼するということを教える恩師を得たことが、後に政治家として大成していくのに大きな要因となった。また、1936年に「地域格差是正」の思想を持つ大河内正敏と出会ったことは、田中の人生における最初の大きな転機であった。田中は、彼の「農村工業論」を「国土復興」と「格差是正」を実現するための一政策としてとらえるようになった。

1939年、田中は徴集兵として、盛岡市に設置されていた騎兵第三旅団第二四連隊第一中隊に入隊し、ノモンハン事件に遭遇した。戦争体験は、中国への贖罪意識やソ連に対する警戒感を田中に抱かせる起点となり、後の田中の「日米中の二等辺三角形」構想の形成に大きな影響を及ぼした。このことは、第六章で詳論する。

陸軍を病気で除隊した後、戦時下に田中は田中建設事務所を開業し、二年後、田中土建工業に発展させ、大河内の庇護の下に事業を拡張し、実業家として成功をおさめた。このように、有力者に気に入られ、基礎を固めた上で、順序よく物事を運ぶというスタイルは、その後一貫して田中の行動に受け継がれていった。

第二節では、1946年の第22回衆議院総選挙における田中の初出馬と選挙活動について論じている。田中が実業家から政界に転身した理由として、二つの理由が大きい。第一に、田中が政治家として、廃墟と化した日本の国土を復興させたいという強い願望があったこと、第二に、大麻唯男による出馬勧誘があったことである。続いて、田中の選挙活動について考察し、田中落選の原因は、一言でいえば、人任せの選挙活動によって田中陣営の足並みが乱れたことにある、と分析している。

第三節では、1947年の第23回衆議院選挙と田中の初当選について述べた。まず始めに、田中が再び選挙に挑んだ三つの大きな理由を取り上げている。すなわち、第一に、田中の政治への情熱と社会的地位向上の野心、第二に、初出馬以来、田中の心に強く根付いた「国土復興」の理念と、それに基づいた「格差是正」の実現を果たしたいという強い願望、第三に、憲法改正、民主化により、「土建屋でも国会議員になれる。国会議員になれば立法権が行使できる」と考えたことである。

続いて、第23回衆議院選挙前の新潟三区の状況を検討し、田中の初当選に関して以下の事柄

を明らかにした。大選挙区制から中選挙区制への移行が、田中の選挙活動に有利に作用し、田中は、既に中心部の三条や長岡に地盤を築いていた亙四郎陣営に対抗し、柏崎・刈羽と南魚沼を主眼とした選挙戦略を取り、前回の総選挙での失敗から教訓を得て、自ら選挙運動の指揮をとることによって、第3位で初当選を果たすことができたのである。

第二章 吉田茂内閣、岸信介内閣、池田勇人内閣における田中角栄の政治指導

第一節は、新憲法下での代議士としての田中角栄、すなわち民主自由党、法務政務次官への就任、獄中当選、議員立法（「道路三法」の成立）、大平正芳との関係、保守合同等に焦点を当てる。すなわち、田中は、保守政党である旧進歩党や保守・中道政党である旧民主党を経て、「保守本流」となる吉田の流れに潜り込むことになった。そして、吉田に合流したことこそが、田中が権力の階段を上がっていく大きな一歩となった。

1948年10月19日、第二次吉田内閣において、田中は法務政務次官に就任した。一般的に政務次官に就任するのは当選2回の二期生議員であることから、田中が当選1回で法務政務次官に就任したのは異例の抜擢であった。炭鉱国管疑獄事件で、田中の法務政務次官時代は短かったものの、田中は、力強い行動力と戦後の日本復興実現への情熱を吉田茂をはじめとする多くの政治家に印象づけ、党内においても一定の存在感を示した。次に、「道路三法」の成立を中心に、第24回総選挙で、獄中で立候補し当選した田中が、議員立法を通して、住宅、道路、国土開発などの国民生活環境の整備や、社会的弱者に対する支援救済立法を行ったことを論じる。

中央政界での田中の努力と働きは、新潟三区の有権者たちによって認められ、第25回総選挙で初めてトップ当選を果たすことにつながった。そして、1953年の第26回総選挙では、田中は2回目のトップ当選を果たし、これによって田中の地元の政治基盤は確かなものとなった。連続トップ当選を続けていくことは、田中が、中央政界において政治活動や人脈作りをする余裕ができてくるようになり、大物政治家になっていく上で、必要不可欠な条件であった。

さらに、建設相であった佐藤栄作が「道路三法」を成立させた田中の決断力、剛直果敢な仕事ぶりや政治的発想力を高く評価し、それ以降田中に期待し続けるようになった。田中が議員立法をやったのけたことは、後に強い政治指導によって国政を動かす政治家になる上で、大きな意味を持ったのである。

後に日中国交正常化で大きな役割を果たすことになる、大平正芳と田中との長期にわたる盟友関係も始まった。田中と大平を結びつけた要因としては、第一に、二人とも青少年期において、程度は異なるものの貧しい境遇を経験したこと、第二に、同じく「保守本流」に与していたこと、第三に、エリートに対するコンプレックスがあったこと、第四に、息子を亡くした経験を共有していたこと、の四つを挙げることができる。

その後、田中は自民党の結党に参加し、以後、「吉田学校」の一員として、保守本流路線の堅持に尽力したのである。

また、本論文では、1956年11月、岸と石橋が争う総裁選の際の佐藤と池田の動きや、佐藤派と池田派の派閥構成を検討した上で、田中がなぜ池田派ではなく、佐藤派に入ったかについて

も検討した。その一つの理由は、1956年11月、岸と石橋が争った総裁選の際、池田が急進的な憲法改正・再軍備論者として知られた石橋を推すことに、田中が違和感を覚えていたことである。もう一つの理由は、佐藤派には戦後党人派政治家が多数属していたのに対して、池田派には大蔵省官僚出身者が多数控えていたことにより、田中はエリート官僚出身者の多い池田派ではなく、佐藤派に親近感を覚えたのである。

第二節は、岸信介内閣および岸内閣における田中の郵政大臣時代に焦点を当てている。内閣において、郵政大臣は必ずしも重要なポストではないものの、若手政治家の田中にとっては、テレビ大量予備免許許可を実現させたことによって、田中が政治権力を強める良い機会となった。

第三節は、池田勇人首相と田中の協調に焦点を当てている。第一次池田内閣誕生の際、田中は佐藤派と池田派の提携を促した。そして、第二次池田内閣においては、高度経済成長路線を理解する田中は政調会長に就任し、これが自民党の権力の中枢に入っていく第一歩となった。さらに、第三次池田内閣の組閣に当たって、田中は池田に深く信頼され、大平と連携して閣僚人事を主導することになり、それぞれ蔵相と外相に就任した。対中構想においては、田中に大きな影響を及ぼしたのは池田勇人であった。田中は、池田の「日中には前向き」という基本姿勢に共鳴した。田中が、LT貿易が順調に進められるように尽力した点を考察するなら、池田の日中関係に対する考え方、すなわち「貿易の面からまず日中関係の改善を図ろう」という考え方を、田中は深く理解していたといえる。池田後継内閣をめぐって、田中は、保守政権の安定や経済重視政策の継続のためだけでなく、強い権力志向から、自らが自民党政権の中枢に入ることを目標にして、次期佐藤内閣の樹立を目指した。

第三章 第一次・第二次佐藤栄作内閣と田中角栄

第一節では、第一次佐藤内閣における田中の社会開発政策と財政政策について検討した。社会開発政策では、田中は、政府が公営住宅を建てるよりも、民間の住宅建設を促進すべきだと説き、「公共性を尊重する理念」を重んじる佐藤・福田と政策的距離を置いた。また、財政政策では、田中は、公債発行で急進的に進めようとした佐藤・福田と違って、日銀特融の決断など、財政面で均衡政策を行って漸進的

に適応を図ろうとした。そして、第一次佐藤内閣期における田中と佐藤・福田の考え方の相違から、後に佐藤は田中の代わりに福田を蔵相にし、巧みに党内をまとめていった。また、田中による日銀特融の決断は、状況志向的政策であり、まさに田中の素早い政治的決断によって推進されたものであるといえる。

第二節は、佐藤第一次改造内閣における田中の幹事長時代について焦点を当てる。最も重要な点は、幹事長就任によって、田中は同内閣と自民党権力の中枢に残り続けたものの、「黒い霧」問題の責任を問われ、一時中央政界から離れざるを得なかったという点である。

第三節では、田中が都市政策調査会会長として、『都市政策大綱』を作成した過程を取り上げる。田中は、『都市政策大綱』を作成する過程において自身の政治思想を軸に中央省庁を横断する形で各省の官僚たちをブレーンとして使い、彼らのアイデアを『都市政策大綱』に反映させ

ていった。この事実から、『都市政策大綱』作成の過程を通して、田中の官僚を使いこなす政治手法が円熟さを増していたことがわかる。また田中は、『都市政策大綱』の作成を通じて、高度経済成長がもたらした社会的矛盾に対応できる卓越した政治家として、自身を世論に印象づけることに成功した。田中は自民党内外において評価を高め、幹事長に返り咲いた。他方、田中は、民間不動産業界の期待に応えることによって、莫大な政治献金を獲得、集票能力を強め、自民党の利益誘導政治の本格的な形成と拡大に深く関わっていった。有力な官僚出身政治家に対抗していくためには、田中にはこの手段がもっとも取りやすかったが、これは田中政治のマイナス面となっていった。

第四章 第三次佐藤栄作内閣と日米繊維問題

第一節では、日米繊維問題が政治問題に発展した経緯を概観した上で、大平正芳と宮沢喜一の両通産相の問題打開への努力と行き詰まりを考察した。大平が事実調査にこだわりすぎたことと、宮沢がアメリカ側や繊維業界に十分な根回しをせずに自主規制宣言を出したことによって、日米繊維問題は難航した。

第二節では、日米繊維問題をめぐる田中角栄と福田赳夫の対立に考察を加えた。第三次佐藤内閣の改造人事で、田中と福田はそれぞれに通産相と外相に就任した。日米繊維問題において、福田外相は、繊維の対米輸出規制に関連して、自主規制の内容を厳しくすることよりも、現行の規制内容をそのまま政府間協定に切り替えることが得策だと判断し、機会を見てアメリカ側と話し合いを進める方針であった。これに対して、田中は、通産省と繊維業界への根回しをしなければこの問題は解決できないと、アメリカの動向を厳しく認識していた。

第三節では、日米繊維問題における田中の政治指導と、ポスト佐藤への過程に焦点を当てて考察した。田中は、日米繊維問題において、アメリカ側に譲歩を迫ろうとする粘り強さを見せつつ、自民党内や繊維業界に丹念な根回しをした上で、日米政府間協定を結ばせ、繊維業界への救済融資を実施させた。このことによって田中は、日米繊維問題を解決し、ポスト佐藤の有力候補として台頭していった。

第五章 日中国交正常化気運の高揚と田中角栄

第一節では、佐藤四選をめぐる政治情勢を概観し、岸や福田の思惑を裏切り、佐藤が田中・川島を留任させた理由に言及している。それは第一に、佐藤の「沖縄返還」に対する政治的野望、第二に、佐藤の「角福調整」への自信、が挙げられる。

第二節では、米中接近後の極東の国際秩序を考察した上で、それに対する田中の捉え方の特徴を明らかにした。その特徴とは、第一に、田中は米中両国の主導のもとで極東の新しい国際秩序が形成されることを好意的に受けとめたこと、第二に、田中は米中接近後の極東における国際秩序のあり方を日中関係に関連づけて考えたことである。日中問題について、田中は橋本恕中国課長から助言を受けた。橋本が田中に接近した理由は、第一に、橋本自身が佐藤の対中政策に強い反感を持っていたこと、第二に、橋本が幹事長時代からの田中を傑物と見ていたこと、第三に、

田中の秘書であった早坂茂三と麓邦明による勧誘を受けたことにある。その後、1972年2月27日、田中は中国への謝罪を言明した。田中の謝罪は、戦後処理という中国側がもっとも重視する事柄に触れ、中国人の心をつかみ、日中国交正常化の核心問題に触れたという点で高く評価されるものである。さらに、本節では、田中が「日米中の二等辺三角形」構想を形成させた背景についても検討を加えた。

第三節では、日中貿易の障害となっていた日本輸出入銀行資金の再開問題に着目し、それをめぐる田中と福田の考え方の相違を明らかにした。通産相として田中は、日本の平和政策・貿易政策において、中国への差別政策の存続が不合理であり、多少トラブルは覚悟してでも廃棄すべきであると考え、輸銀再開問題を主導した。田中に対し、福田は主に次の二つの理由により反論した。第一に、福田は、中国には不信を抱き、台湾との連携を重んじていたことと、第二に、対ソ関係を重視していたことである。

第四節では、大平の動きと、田中一大平ラインの展開に焦点を当てる。佐藤内閣末期、田中は内政において内需の振興、対外経済摩擦の解消を、外交においては日中国交正常化を掲げ、大平と政策的にも接近し、安定成長論や対中国慎重論を唱える福田を孤立に追い込んでいった。田中一大平ラインの連携は、田中が福田に勝利し、政権を取っていく上で、大きな役割を果たした。他方、1970年から1972年にかけて、財界や国民世論は中国への傾斜を深めていった。それが、田中新内閣が積極的な対中政策を進める背景となり、最終的に田中首相の早期訪中の実現となっていくのである。

第六章 田中角栄内閣の成立と中国

第一節では、田中が自民党総裁選で勝利するまでの経緯として、佐藤による「角福調整」の失敗、佐藤内の田中系グループの旗揚げ、田中の中曽根派に対する多数派工作に焦点を当てて検討した。その結果、中国問題をめぐる対応が、田中と福田の明暗を分けたもっとも重要な要因であったことを示した。

第二節では、田中による組閣工作について検討した上で、田中が日中国交正常化の実現のため、用意周到な政治手法を用いたことを論じた。すなわち、組閣工作の特徴は、第一に、日中国交正常化交渉に対する布石を打っていたこと、第二に、田中派主導の人事であったこと、第三に、田中が行政手腕を重視して実務に強い人材を多く登用したことにある。さらに、田中内閣に対するマスコミの論調についても検討し、田中内閣へのマスコミの期待が高かったこと、またその理由として、田中内閣の樹立によって、中国との関係に根本的な転換が訪れ、それが日本に国際的な安定をもたらすだろうという予測がその基底にあったことを挙げた。

第三節では、中国側の田中角栄内閣成立への対応として、田中首相の所信談話が中国の政府機関紙である『人民日報』に掲載されるまでの政治的過程を考察し、毛沢東・周恩来が田中のリーダーシップに期待していたことを明らかにした。

第七章 田中角栄と日中国交正常化への道

第一節では、日中国交正常化をめぐる自民党内の紛争における田中の政治指導について検討を行い、「日中国交正常化協議会」の設置における田中の政治指導を考察することによって、以下の点を明らかにした。すなわち、田中は、総裁就任の一週間後、「中国問題小委員会」を発展的に改組して「日中国交正常化協議会」を作った。「日中国交正常化協議会」は総裁直属とし、自民党全党規模の賛同を集めて、政調会や総務会の頭越しに方針を決定したのである。こうして田中は、中国問題の早期打開への決意を示した。また本論文は、田中が、目前の当選を最重視する地盤の弱い若手議員に、強硬な態度を示し圧力をかけることによって、親台派の戦前組と戦後組を切り崩した政治手法についても注目した。

第二節では、野党を用いる田中外交の手法に焦点を当てて考察した。佐藤政権末期に、佐藤と福田が外務省の中国ルートを使って、水面下で、日中国交正常化の交渉をしたが、うまく行かなかった。この失敗を十分に考慮に入れて、田中は、日中共同声明案をめぐる中国側の意向を探るために、自らが主導し、竹入義勝をはじめとする野党党首の協力を取り付け、非公式なルートを駆使した水面下の外交を展開させていった。日中国交正常化は、野党外交ペースというより、政治指導を発揮し、野党も駆使した田中の外交手腕により大きく進展したのである。

第三節では、日米首脳会談と台湾への特使派遣について検討している。日米首脳会談において、田中は、対米緊急輸入を決定したことで、アメリカの不满を和らげ、早期の日中国交正常化を快く思わないアメリカの注文を封じ、対中交渉に臨む良好な国際環境を創出した。また、アメリカの了解を取り付けることに関連し、日中国交正常化について台湾に事情説明をし、理解を求めるため、田中は、親台湾派の椎名悦三郎を特使として台湾に派遣することを主導した。こうして、断交前の台湾に田中なりの誠意を示したのである。

第四節では、中国指導部による国民説得工作について、中国外交部資料「内部宣伝提綱」を用いて検討した。ここで明らかになった重要な点は、中国側が一番評価し、また国民説得に用いたのは、国内外の情勢云々というより、田中がある程度アメリカから自立し、自主の一步を踏み出した政治的勇気と誠意であった、ということである。

第五節では、日中国交正常化交渉と日中国交正常化後の日中関係について検討した。日中国交正常化当時の日本の外交記録と中国外交部の史料を考察するならば、北京での日中国交正常化交渉において、田中が、「日米中の二等辺三角形」構想を貫いたことは明白である。また一方で、首相としての田中は、ソ連を排除して、日米中の三国で極東の安全を確保するという構想の下で、日中国交正常化交渉に臨んだ。日中国交正常化交渉の過程において、田中は、日米安保体制を堅持し、台湾との民間交流を残すことを根本方針として、日中国交正常化交渉の詳細を大平外相と外務省官僚に任せた。田中がこのような合理的で円熟した政治手法を身につけるようになったきっかけは、大蔵官僚の専門性に信頼し、一貫して健全財政の方針を貫いた第三次池田内閣の蔵相時代にあったということができる。

おわりに

ここでは、以上の検討を踏まえ、四つの結論を提示した。

第一に、田中は、日中国交正常化の実現に池田勇人内閣期から強い情熱を持っており、東アジアにおける平和的国際環境を整えることによって、日本の発展を図るという政治構想の下で、首相として日中国交正常化を実現したことである。つまり、日中国交正常化に向けて、田中は、政治人生を通じて培われた、慎重な根回し・官僚の使いこなし・迅速な行動力を柱とする政治手法を用いて、日中国交正常化交渉の政治的土台を作り、交渉過程において、強力な政治指導を行って、日中関係を正常化させた。

第二に、田中は、高度経済成長期に対応する政策実行能力を示すことで、自民党権力の中核に入り、ポスト佐藤の有力候補として台頭し、日中国交正常化を実現させるための権力基盤を築き上げたことである。田中は、議員立法、テレビ大量予備免許の交付、財政政策、住宅・都市政策、日米繊維問題の解決や外交政策を強力に実行し、自民党政権の中を着実にのし上がっていったのである。

第三に、田中は、日中国交正常化を掲げて大平と田中—大平ラインを展開し、終始、対中国慎重論を唱える福田赳夫を孤立に追い込み、彼に勝利したことである。すなわち、佐藤内閣において、福田はポスト佐藤の最有力候補と見なされていたが、官僚を上手に使いこなせず、安定成長論に固執しすぎ、高度経済成長期に的確に対応できなかったことが、彼の敗北を促進したのである。

第四に、田中が 1946 年の第 22 回衆議院総選挙での落選から教訓を得て、翌年の総選挙で当選した後、1952 年の総選挙までに、どのような過程を経て選挙基盤を安定させたかということの本論の中で明らかにした。

最後に、日中国交正常化後の見通しについて述べた。田中は、日中国交正常化を実現させたところで、政治スキャンダルにより失脚した。しかし、その後に展開した日中友好条約の締結、台湾との民間交流の持続、日中貿易の飛躍的な拡大、中国の改革開放への日本の経済的援助と日系企業の進出は、まさに田中が構想し、先鞭をつけたものである。日中国交正常化を成し遂げた田中の政治指導は大いに評価されるべきである。

他方、日本経済は全体として豊かにはなったが、農村と都市の格差はむしろ広がっており、農村部では、深刻な過疎化が進んでいることから、その面で、田中の理想は必ずしも実現されていない。

しかしながら、日中国交正常化を実現させた田中角栄の確かな政治構想や、長期的展望に基づく明快な決断、実行力や慎重な根回しを柱とする政治指導・政治手法、これらを今一度考察することは、今後の世界情勢における日中関係の再構築を考える上で、大きな示唆を与えてくれるといえよう。